

働き方 ASU-NET 第 24 回つどい

2016 年 3 月 16 日・エル大阪

未来を切り開く連帯 ～若者たちの運動から学びあう

〈登壇者〉

POSSE、ブラックバイトユニオン 坂倉 昇平さん

関西学生アルバイトユニオン 北村 諒さん

地域労組おおさか青年部 北出 茂さん

SEALDs 関西 寺田 ともかさん

SADL 中村 研さん

ANTS 磯田 圭介さん

AEQUITAS 京都 橋口 昌治さん

〈司会〉 清水亮宏弁護士・岩城穰弁護士

〈主催者挨拶〉 森岡孝二

〈開会あいさつ〉

清水 みなさん、こんばんは。本日はお忙しいところ、ご参加いただきましてありがとうございます。ただいまから NPO 法人働き方 ASU-NET の第 24 回つどい「未来を切り開く連帯～若者たちと学びあう」を開会いたします。本日、司会をつとめさせていただきます弁護士清水亮宏と申します。本日はどうぞよろしくお願いたします。それでは開会にあたりまして、主催者を代表いたしまして、「NPO 法人働き方 ASU-NET」代表理事の森岡孝二より、開会のご挨拶をさせていただきます。森岡さん、よろしくお願いたします。

森岡 こんばんは。年度末のご多用なところ、かくも多数ご参集いただきまして、大変ありがとうございます。私は今日、午後 1 時から 3 時まで東京で、過労死防止法に関連した厚労省の委託調査のまとめ作業があって、その会議に出席して、とんぼ返りでここに駆けつけました。歴史の上で、とんぼ返りとは言いませんが、先祖返りという言葉があります。これが時代逆行ということもよく言われます。今、日本の様々な面でそういうことが起きている。戦争法案といわれる安保関連法案。これは結局、政治・軍事・憲政、いろんな面における戦前回帰でありまして、我々、ある面では戦前に立っていると。戦争責任という言葉がありますが、戦前責任と、それを本当に戦争にさせるか、させないかという責任が問われる、そういう時代であります。私は雇用の問題をずっと勉強して参りましたが、雇用でも似たようなことがありましてね、岩波新書になっていますが、「雇用身分社会」という本で、日本の雇用がある面で「女工哀史」の時代、あの本が出たのは 1925 年なんです、

そういう時代に近い。特にブラック企業の源流を遡っていくと、そこに行き着くというようなことを書きました。まだ、しっかり戦前体制に戻っているわけじゃなくて、いつでも止められるという状況ではありますが、我々は止めるために声を上げる、と。それで、この宣伝も兼ねて、この後書きに書いたことを、ここで少し読ませさせていただきます。

「最後に場違いを承知で言い添えたいことがある。私は 2014 年 1 月に関西大学経済学部で行った最終講義のかわりに、過労死防止法の制定や、ブラック企業批判の高まりや、反原発運動の盛り上がりなどを挙げて、人びとが声を上げることの大切さを訴えた。15 年の夏は、「安全保障関連法案」という名の戦争法案に対して学生や若者や母親が街頭に出て反対の声を上げるニュースに接することが多くなった。これには長年の教員生活において出逢ったことのない大きな変化を感じる。願わくば戦前回帰の雇用・労働改革についても、もっと関心と疑問が広がり、まともな雇用の実現を求める声が高まってほしいものである。2015 年 9 月 17 日 戦争法案廃案の声を聞きながら」

つい先だって、2 月 28 日に放送された NHK のグローバル・ディベート・ウィズダムという番組があって、どうやら最終回だったらしいんですが、そこでも最後に番が回ってきて、ひとこと、ということと言ったのは、世の中の動きを考えて、これを変えるのは一番当事者である人々、とりわけ若者で、今、日本では 18 歳から参政権があって、選挙で有権者として政治選択できると。であればあるほど、大きな声を上げて欲しい、と。今日はこういう顔ぶれで団体が集って、若い人の声を直に聞けるというので、またとない機会だと思います。私も皆さんとともに、楽しみにして参加いたしました。今日はよろしくお願いたします。(拍手)

清水 森岡さん、ありがとうございました。本日の第 1 部は、それぞれの分野で奮闘されている青年のみなさんによるリレートークです。7 つの団体から、代表してお越しいただいておりますので、順番にお話をさせていただきます。ここでは、まず、主に労働問題に取り組んでいる 3 つの団体から報告をさせていただきます。その後には平和・民主主義の問題に取り組んでいる団体から報告をさせていただきます。それではまず、NPO 法人 POSSE の坂倉昇平さん、よろしくお願いたします。

〈第 1 部 各団体からの発言〉

坂倉昇平 (POSSE・ブラックバイトユニオン)

みなさん、こんにち。私は NPO 法人 POSSE と、あと、現在、ブラックバイトユニオンという学生のアルバイト問題に取り組む労働組合をやっております坂倉と申します。ふたつの団体についてご紹介させていただきたいと思ます。

非正規問題からスタート

NPO 法人 POSSE という団体を作りましたのは 2006 年で、ちょうど今年で 10 周年になります。私も立ち上げメンバーで関わっているんですけども、当時 2005 年から 2006 年頃に、フリーターとかニート問題と呼ばれるような、若者の非正規雇用の問題が話題になっていたんですね。そこで、ちょうど若者の労働問題が初めて社会的に話題になった時期だったわけです。そのころは、悪いのは若者である、と。正社員になれないような若者が増えているのであって、若者が劣化していることが問題なんだという、まるで逆の問題設定の言説が非常にまかり通っていました。そういう中で、非正規の若者たちが、非常に劣悪な条件で働いていると。彼らをちゃんとサポートしていくような団体が必要であるということで、私たちはこの NPO を立ち上げました。

なぜ NPO という形で立ち上げたのかというと、やはり若者が労働問題、労働相談といったときに、いろんな専門家や機関がいるわけですね。労働基準監督署、労働組合といろいろあるわけですけども、なかなか最初は話じらいと。であれば、ハードルを下げて、相談しやすいような形を作りたいということで、NPO という形で始めました。

正社員とブラック企業問題

ところが、非正規の若者の問題に取り組むということで始めた POSSE だったんですけども、2010 年ごろからちょっと変化が訪れます。正社員の方の相談が増えるようになったんですね。従来、若者であっても正社員であれば、一生雇われるんじゃないか、終身雇用なんじゃないか、年功賃金なんじゃないかと思われていたわけなんですけれども、実は働き始めて 1 年や 2 年で解雇になってしまったりとか、あるいは長時間労働やパワハラで、身体やメンタルがボロボロになって使いつぶされてしまうという相談が増えてきたんです。その中で、相談に来る方の中でも、「うちはブラック企業なんですかね」という言葉を受けるようになってきたんですね。こういった新卒で働き始めたばかりの正社員が使いつぶされてしまう問題、ブラック企業の問題が 2010 年ごろから深刻化してきたということが、私たちの相談の中からもはっきりしてきたんです。

こういう中で、だいたい 2011 年、12 年ごろから、年間 1,000 件の相談を受けるようになっていきます。私たちは、単にひとつひとつの相談に対応するだけじゃなくて、その個別の相談から、できるだけ社会的に発信して、これが社会問題なんだということを伝えていくことが必要だということを、常に心がけて取り組んできました。ひとつは「ブラック企業問題」というのは、単に悪口とか、若者の言葉ではなくて、本当に社会問題なんだということを発信していく必要があるということで、様々なメディアですとか、あるいはうちの代表は今野晴貴という者なんですけど、彼が文春新書から「ブラック企業」という本を書いて、ベストセラーになったんですけども、そういう形でブラック企業というのは社会問題として、政策課題として発信してい

くということをやってまいりました。

ちなみにその取り組みのひとつとして、私たちの NPO として雑誌も出しております、これ、2008 年から出しているんですけども、実は私が編集長をやっております。ブラックバイト問題とユニオンの立ち上げ

こういったブラック企業問題にちょっと取り組みまして、2012 年、2013 年には流行語大賞なんかもいただいたんですけども、そうやってブラック企業が話題になっていく中で、もうひとつ新たな問題が出てきました。学生のブラックバイト問題です。ブラック企業は正社員の若者が使いつぶされてしまうという問題でしたけれども、学生のアルバイトまでもが、学生であるにも関わらず、学業とか学生生活、就活とか、そういったものにまったく配慮されずに、非常に過重な仕事や責任を負わされて使いつぶされてしまうという問題が多発するようになってきたんですね。で、これはヤバいということで、私たちとしても、単に NPO 法人 POSSE だけではなくて、ブラックバイトに取り組む団体を作ろうということで、ブラックバイトユニオンという労働組合を 2014 年の 8 月に立ち上げました。こちらは労働組合ということで、もともと僕らは NPO という形で始めたんですけども、これからはむしろ、学生や若者が自分たちで、当事者が声を上げていくことが必要だと。しかも労働組合というものの自体のイメージももっと刷新していく必要があるだろうということで、NPO を初めて 8 年目に、私たち自身が労働組合を作るに至ったということです。

とはいえ、最初はなかなか相談は来なかったですね。月 10 件とか 20 件ぐらいかな。けれども、その後、いろいろ話題にさせていただけるようになって、今、月 150 件ぐらいの相談が来てまして、2015 年だけでも 1,500 件ほどの相談が来ています。

相談内容としては、アルバイトを辞められないとか、休めないとか、あるいはお給料がちゃんと払われないとかっていう相談が非常に多いです。例えば来月テストがあり勉強しないといけないのでシフトを減らしたいんだけど減らしてもらえないとか、あるいは辞めようと思っても、店長に「お前辞めるのか、無責任だな」とか「自分勝手だろう」と責められてしまって、実際仕事も多いので辞められなくなってしまいうケースなんか非常に多かったです。私たちがそのブラックバイト問題にどうやって取り組むのかというと、労働組合なので、主に団体交渉をしています。ただ、単に団体交渉をするだけでは面白くない、それをもっと大きな闘いにしたい、というのが、私たちが心がけていることです。具体的にはその相談に来られた方のサポートというだけではなく、会社全体とか、あるいは業界全体に改善を広げていくという取り組みをやっています。

労働協約締結のたたかい

ひとつは、具体的なお話をしたほうがわかりやすいかなと思うんですけども、埼玉県でサンクスというコンビニで働いていた高校 3 年生の学生からの相談で、そのサン

クスでは15分単位で給料が払われていて、1分単位で払われていないと。それで未払分がかなり発生しているという問題があったんです。この高校生の方は、たまたま僕らが労働法教育でその高校生の方の高校に授業に行き、そこでこういったアルバイトユニオンをやりますよという話をしたところ、ぜひやりたいです、じゃあ、やろうということになったんです。で、早速そのサンクスで団体交渉したんですが、その高校3年生の方と、あと高校の先生も一緒に団体交渉するという、労働組合としてはかなり珍しいパターンなのかなと思いますけれども、生徒と先生と一緒に団体交渉をするという形でやりました。その中で、先生だって労働法とかあまり知らない方も結構多いんですが、結構説得力あってですね、「こんなひどい働き方をさせて、あなたは大人として恥ずかしい」とか言って、むしろ店長を説教するみたいな形で、団体交渉が説教の場になってしまう、そんな形でやったわけです。単にこれは、高校生が立ち上がったということだけではなくて、できるだけその成果を広げたいということで、これは彼だけの問題ではなくて、その職場で働いていた他の人たち、アルバイト、正社員全体が、やっぱりいろんな被害にあっている。15分単位で賃金が払われていない、ということで、これを全部改善してほしいということを会社に対して強く働きかけました。で、いろいろやった結果、最終的に1分単位、これは労働基準法通りなんで当たり前なんですけれども、1分単位で賃金を払うということ、労働協約にして、1回職場を改善するという形を実現させました。それだけではなくて、過去2年分遡って、従業員70人に対して500万円分給料を払うということまでさせまして、ひとりの高校3年生が闘っただけで、アルバイトや正社員全体の、会社全体の労働条件を改善することができるということを実例として作りまして、それをちょうど昨日、記者会見で発表して、高校生でも立ち上げられるんだ、ということを広げて、そういったモデルを示してました。

業界別ユニオンの結成

それだけではなくて、やはりブラック企業、ブラックバイト問題と言ったときに、業界全体に問題点が多いんですね。仮に1社だけ変わったとしても、労働条件を良くすることによって競争力が落ちて、そこがつぶれてしまうということになってしまったら問題です。そこで、業界全体をターゲットにする必要があるだろうということで、去年、6月に「個別指導塾ユニオン」という塾のユニオンを作りました。ブラックバイトユニオンには毎月150件ぐらいの相談が来るわけなんですけれども、うち、3割ぐらいが個別指導塾、塾なんですね。で、塾にあまりに集中しているので、この塾を改善する必要があるということで、塾のユニオンを立ち上げて、塾の中でも最大手とまず闘おうということで、個別指導塾の最大手である明光義塾という塾と団体交渉をしてきました。ちょうどそこから相談が来たので、大学1年生、5年間●?働いている学生さんたちで相談にきました。そこでは彼はベテランで、もう本当に会社のいろ

んなことを知ってるわけなんですけども、指導の時間分しか賃金が払われない。それでみんな苦しんでいると。さらには生徒が、僕もこの塾で働きたいとかいうふうに言い出してる。自分は講師として、確かに子どもがそう思ってくれるのは嬉しいけれども、自分が5年間働いてきたこの職場でその生徒を働かせることはできない、こんな違法状態がまかり通るような職場で働かせることはできないんだということで、だったら、じゃあもう改善するしかないということで彼は立ち上がってくれたんですね。団体交渉をずっとやりまして、しかも、明光義塾ってフランチャイズで500社ぐらいあるんですけども、その1社だったにもかかわらず、そのフランチャイズの会社と本社と両方に団体交渉を申し入れて、2社同時に団体交渉をやりまして、最終的にどちらも改善させて、授業時間以外の賃金も払われるという形にして、約2年分の賃金も払わせる。これも全従業員に対して。で、明光のその本部のほうは、今年の1月に4億5千万円を従業員に払って、うちには1円も払われてないですけど、改善をさせました。

こういった形で、高校生や大学生が、労働組合という形で自分自身が立ち上がって、それを私たちがサポートし、正社員・非正規を含めた会社全体、あるいは業界全体、明光義塾は業界最大手なんで、そこが変わったことによって、他の会社にもかなり影響力があって、明光が変わったからうちも変わらなきゃまずい、みたいなことが、今、実は業界全体に広がりつつあるんですね。そういった形で、その会社だけじゃなく、ブラック企業、ブラックバイトの業界全体を改善するような試みを、私たちとしてはやっております。

お話し足りないところはたくさんあるんですけども、もう時間が来てしまいましたので、また後半のディスカッションで話させていただければと思います。(拍手)

北村諒(関西学生アルバイトユニオン)

関西学生アルバイトユニオンで事務局次長をやっております北村です。関西大学の4回生、もう19日で卒業で、22日からは楽しい就職生活が待っております。

僕たちの団体は2015年の2月21日に結成しました。現在、組合員数はだいたい30人ぐらいで、ほとんどが大学生です。大阪と京都を中心にした学生が結構集まっているというような感じで活動しております。

作った理由をお話させていただこうかなと思うんですけども、一応2つぐらいあります。1つは、作ろうと言い出した前共同代表が2人ともブラックバイトで働いていたということですね。関大で僕の同級生のワタナベくんという子と市大のヒイラギさんという人がやってたんですけども、ワタナベくんは、弁当の宅配のバイトをやってて、原付で60キロで飛ばして弁当を宅配しろと言われてたりとか——皆さん、間違えないで下さいね、30キロまでですから——、2年前でなぜか大阪で最賃以下の750円ぐらいで働いてたり、みたいなことがあったり、有給がなかつ

たりというようなことをやっていたと。で、ヒイラギさんのほうも、塾のバイトですと働いていたんだけど、先ほどの坂倉さんの話にもあったように授業分しか給料が出ないという上に、何か突然、即日解雇されたことがあったということですね。自分たちがバイトをしているというきっかけからユニオンを始めたということが1つ目にあります。

もうひとつは、今回、関西学生アルバイトユニオンに集まっているメンバーは、年末年始とかに大阪の釜ヶ崎で野宿者支援のボランティアに参加していたメンバーで、そういう活動をしているうちに、最初はたぶん、こういう状況がおかしいじゃないかとか、困ってる人を助けたいということがあったと思うんですけど、そこから、これ、失業とか働き方の問題って自分たちでも一緒にしないかというようなことを思い始めて、で、そういう中で、ちょうど去年とか、最近、ブラック企業だったりブラックバイトということが問題になっているということで、やっぱり学生が相談しやすいのは学生だろうというふうに思い至りまして、結成をしたということですね。まだまだユニオン2年生で、ブラックバイトユニオンさんととか比べたら相談もまだ少なく、1ヶ月に10件もあるかないかぐらいなんですけれども、そういうふうにしてやっております。

目的というか、関西学生アルバイトユニオンが、どういうところを大事にしているのかということなんですけれども、一応、スローガンというか、モットーというか、「耐える強さを変える力に」ということを言っています。結成時の目標は、「学生が気軽に相談でき、自らの問題解決を通じて、社会をよりよいものに変えていく」ということを目指しています。いろんな相談が来ます。特に「辞めたい」という相談がやっぱり非常に多いんですけれども、そういう中で、なんでこんなことになってるんだろう、ということと一緒に考える、あるいは私たちが普段、いろんな相談だったりということに直面した上で、なんでブラックバイトが増えてんだ、と、どうしてこういうことになってるのかということ伝えて上で、一緒に考えていくことを目指しているわけです。とりわけ、うちのメンバーはほぼ大学生ですので、やっぱり学内でそういう声をちゃんと広げていくということが重要なのではないかなというふうに思っています。

今、大学の中というのは非常に自由がきかないというか、たとえば立て看が出せないとか、ビラが自分たちでまけないとかいうようなことがあるんですけども、学生が学ぶということは、単純に就職のためとかいうわけではなくて、答えが無いものを、自分たちで調べて、問いをたてることからスタートして考えていくということ、それを突き詰めていけば、社会をよりよくしていく考え方だったり動きということにつながっていくと考えているんですけども、そういうことができない状況に、バイトや奨学金の問題がしてしまっている。余談ですけど、僕も奨学金を借りていまして、今年の8月から月12万、この間まで

借りていたんで途中でやめたんですけど、500万ぐらい返すんですけども、っていうようなことがあるということ、非常にとにもかくにも学べない環境というのがやっぱりあるということです。

それで、働くこと、学ぶことということ、ちゃんと自分たちで問い直そうと、学ぶということはさっき言ったとおり、みんなで考えていくものだろうと。働くことというのも、今みたいにブラック企業や、それ以前でもずっと日本では過労死という問題があったように、個別にバラバラにされて、ということではなく、ちゃんとみんなでつながって、うんうん唸りながら考えたり、俺はこういうことができるんだ、ということがちゃんと社会的に認められるという、本当は楽しいものではないのかなというふうに考えているわけです。

そういうことが、今の大学では、あるいは職場でもできないと。であるならば、やっぱりひとりひとりがそういうことを考えていく、考えていける土壌になっていく必要があるのではないかと考えています。そういうことは非常に難しいというか、まだ実践できていないことなんですけれども、去年、戦争法ということが非常に話題になりましたね。後からもたぶん話がいろいろ出てくると思うんですけども、そういう中で思ったのは、このままいくと、今、ただしんどのもので終わっているというふうに言いましたけど、それが更に、働くことも学ぶことも戦争のためのものになっていくだろうというふうなことを非常に感じています。どれだけいい武器を作れるかとか、どれだけ戦争のために役立つ学問ができるか、とかいうふうになっていくということですね。そういうふうにならないために、すごくひとつひとつのことなのかもしれませんが、今、学生が、うちも何人が相談に来てくれていますが、昨日ファミリーマートとも団体交渉を行いましたけれども、そういう中で声をあげてくれた学生の声を、ただかき消すようなことはしたくないわけです。なぜなら僕たちが向き合っているのは、ただかわいそうな学生というふうに描かれる人間像ではなく、ひとりひとり考えて学んで、一緒に生きていくことができる。つながっていけるというふうを感じるひとりひとりの学生です。学ぶに生きると書いて学生なので、そういうふうな人たちとちゃんとつながりあって、どうすればよりよく生きていけるのか、働いていけるのかということを探求していける、そういうユニオンでありたいなと考えております。またこの後ディスカッションもあると思いますので、少し早いですが、そちらのほうが面白いと思いますので、早めに切り上げさせていただきます。ありがとうございます。(拍手)

北出茂 (地域労組おおさか青年部)

みなさん、こんにちは。地域労組おおさか青年部で書記長を務めております北出と申します。パネリスト団体の紹介に概要が載っています。ここに書かれてあるとおり、結成時期も古く、とりわけ西日本における個人加盟、1人で

も入れる労働組合の先駆けが私どもではないかと自負しております。

私は主に 20 代、30 代の労働相談を担当してきましたが、時には 40 代や 50 代、そして嘱託の 60 代の方の労働相談や団体交渉にも同席させていただくこともありました。そういう意味では全世代の労働相談を担当して、異なる世代ごとのそれぞれの異なる価値観や戸惑いを、まさに目の当たりにしてきたということが出来ます。かつての終身雇用、年功序列という日本型雇用慣行を知っている世代の方々の相談者がよく口にするごとに、「職場が変わってしまった」ということがあげられます。いつからか会社が変わってしまった、職場がおかしくなってしまった、働き方が変わってしまった。正確に言えば、変わったのではなく変えられてしまったんだと思うんです。そのターニングポイントというのは、いくつかあげられますけども、その多くが人為的に行われたものであることは確かです。たとえば 2002 年、カルロス・ゴーンが日産で日本では初めての大量リストラを行いました。これは儲かっているのに首を切るという、戦略的なものであり、しかも大量ということでは日本では初めてでした。リストラというのは見た目の固定費が下がるため、多くの企業がこぞって模倣しました。でも、組織を支えてきた人が辞めて、穴埋めとなる人材も育てていない分、仕事の効率は悪くなる。その結果、本質的な意味では業績が上がらない。またリストラを行う悪循環に陥ったわけですね。リストラはきわめて違法な退職強要に近い、不当な解雇に近いものになりました。毎日反省文を書かせて、露骨に「君にやってもらう仕事は無い」と転職を強要して、自分は無能だと思込ませて、自己都合退職をさせるという手法です。給料の高い管理職からリストラしていった、あとは能力重視の成果型人事を導入しました。成果主義も個人ごとに数字をどれだけ生み出したかが求められます。その自分の数字を守るために、ひとりひとりがタコソボに入ったようになってしまって、新入社員にまで基本的なノウハウを教えなくなった。職場で隣に座っていた人が、同僚ではなく敵になってしまった。パワハラやメンタルヘルスの増大は成果主義によっていびつになった職場環境と無縁では無いと思います。その後、正社員の採用枠自体が絞られて、人員の補充を賃金の安い非正規労働者であらうようになった。非正規雇用が増大したのはあたりまえです。

さて、私は地域労組おおさか青年部で、主に 20 代 30 代の方の労働相談を担当してきました。いわば長期不況とともに、雇用の構造変化が直撃した世代がロスジェネと言われた世代です。私もその世代の当事者として、その流れに挑み、あらがおうとしてきた人間のひとりです。ではロスジェネ世代以降の青年労働者というのはどんな感じなのかということなんですけども、私が本格的に労働相談を始めたころは、まだ雇用のミスマッチ論や、今の若者は軟弱だからすぐに会社を辞めるんだ、という論調が普通に幅をきかせていました。しかし労働相談を受けていて感じたの

は、雇用の著しい劣化、後にブラック企業問題として認知されるに至ったためちやめちやな働かせ方でした。彼らは社会人になった瞬間から、若年世代は社会人になった瞬間から新自由主義の波にさらされました。ですから彼ら彼女らは決して、会社が変になってしまった、とは言いませんでした。

月給 26 万円と書かれていたのに、実際には 15 万円だった。詐欺のような求人に騙されて、大学を卒業後、ブラック企業に新卒入社してしまった 20 代の男性は、涙を浮かべてこういいました。「これが世の中なんですね」って。社会ではこういうのが当たり前なんですね。上手に就職できなかった自分が悪いんですね。ブラック企業労働者や非正規労働者の不安定雇用や低賃金に関する労働相談を受けていて、将来に不安を抱えた日々がいかに彼らの心を苦しめているかを、私は目の当たりにしてきました。彼らは心を病み、そして自らの身体を傷つけていました。10 年以上働いてきた会社を雇止めにされたある 30 代の男性は、自分の拳を壁に打ち付けて無念の怒りを表現していました。夜のお店で働いていた、ある 20 代の女性は、食べては吐きを繰り返し、リストラとオーバードーズ（注：薬物の過剰摂取のこと）を繰り返していました。職場でパワハラに遭ったある 20 代の女性は、誰を責めることもなく自分を責め続けていました。会社ではトイレにこもっては泣き、自分の歯で自分の手の甲と足の膝を噛み続けていました。強いストレスのため、噛み続けられ歯形で傷ついた手の甲は、内出血で真っ赤に染まっていました。

もちろん会社を非難する若者もいることにはいました。しかし、私が見てきたものは、誰をも責めることなく自分を責め続けている青年労働者の姿でした。社会ではこういうのが当たり前なんですね。学生時代は甘かったんですよ。正規になれなかった自分が悪いんですよ。正規雇用を希望しても非正規の職にしか就けないのが当たり前。職を失うと、いつ次の仕事が決まるのかにおびえて、いつかホームレスになるかもしれないのが当たり前と、恐怖におびえる、いつ雇止めにあうかわからないのが当たり前、と。でも、それって本当に当たりのことなんだろうか、と。労働相談を受けていると、非正規社員の低賃金でいつでも都合のよい調整弁として、雇止めに使われる現実というのを否応無しに実感せざるを得ませんでした。そして当事者である彼ら彼女らは、それを当たりのこととして懸命に受け入れようとしていました。ただ、僕は、彼ら彼女らが、唇をかみしめながら声を震わせながら語った当たり前が、悔し涙とともに語った当たり前が、当たり前にまかり通るような世の中になんかしたくはなかったのです。

ひとつの労働問題の背後には、いろんな構造的な問題があります。ですから、私は青年部の書記長としてこのような問題を社会的に告発していこうと覚悟を決めていました。憲法 28 条に規定されている団体交渉権と団体行動権を武器に、私たちはそれらの権利を使って、正しくキレようと呼びかけてきました。辞めるのか、我慢するのかの二

者択一ではなく、正当な権利を主張して、いわば正しくキレるという第3の選択肢を提示してきました。ブラック企業は正面から違法をします。違法なことをします。100人首切りをして争ってくるのは一体何人なのか。未払い残業代を請求してくるのは一体何人なのか。そして闘わなければそれらの違法行為は、追認されてしまう。法律と現実とが食い違ったとき、声を上げなければ、それは追認され、現実のほうに合わされてしまう。

私は労働相談を受けながら、まさに現場から、事実を伝え、事実を発信し、ブラック企業を社会問題化してきました。手前味噌になりますが、私を含む様々な人たちのがんばりで、一定限度、潮目を変えることができたのではないかと考えています。これはもちろん労働組合の力であり、社会の構成員の力です。そして何より長い間、労働組合の重要性を教え、そして闘いの炎、灯火を消すことなく、守り続けてきた方がいたからです。そしてこのような活動を続けることができたのは、応援し支えてくれた方々がいたからです。心からお礼申し上げます。

昔日本にも暗黒時代と言われた時代がありました。個人に死して国体に生きる、肉体に死して霊に生きると。国家が普通に正義の名のもとに、若者の命を消費していました。戦後、個人の尊重を最高理念にした憲法ができたのは、その深い反省に基づくものです。でも今、世の中がどんどんおかしくなっているのを感じます。2011年3月11日、福島原発事故。絶対安全と言いながら事故が起これば、そうでない。そして2015年9月19日、戦争法の制定。数の暴力によって違憲立法が制定されるのを目の当たりにしました。国民主権、基本的人権の尊重、平和主義といったこの国の憲法の理念を体現する、根幹となる原則が、戦後勝ち取られてきた価値観が、大切にされた価値観が、今まさに奪い去られようとしています。ただ、暗闇の中にも光はあります。これまで無関心と言われてきた若い世代が立ち上がっています。明らかにおかしいことに対して多くの人間が行動を起こすようになってきました。民主主義に観客席は無いんです。この国の主権者として、自分の言葉を持ち、そして発言する。これからも不断的な努力を続けて、当たり前前の努力、困難な時代にこそ希望があることを信じて活動していければ、と思っています。どうもありがとうございました。(拍手)

司会 ここまでは主に労働問題に取り組んでいる団体の方々にお話をいただきましたが、ここからは主に、平和・民主主義に取り組んでいるの方々からのお話になります。

寺田ともか (SEALDs 関西)

こんばんは。寺田ともかと申します。今、関西学院大学の4年生で、福祉の勉強を4年間していました。この春から、4月からは、東京でもう1年だけ専門学校に進学する予定です。

まず、SEALDsって何やねんっていう話を最初にして

から、私自身が活動に何で参加しようと思ったかという話をさせていただこうと思います。

SEALDsってというのは、Student Emergency Action for Liberal Democracy-sの略です。東京と、それから東北と、東海と、あと、琉球と、関西、かな、たぶん今5つあるんですけど、私は関西でやっています。日本語に訳すと、「自由と民主主義のための学生の緊急行動」という意味です。SEALDsというと、この夏、突然出てきて、国会前とかで安保法制に反対するデモをやっている、ちょっとイケイケな感じの学生集団だ、というふうに思われることが多いんですけども、私たち、もともと安保法制だけに反対するために集まったわけではなかったんです。

特定秘密保護法から安保法制へ

始まりは一昨年特定秘密保護法の強行採決の様子を見て、「これ、ちょっとやりすぎなんじゃないの」と思った東京の学生数人が、デモをやってみようということで、特定秘密保護法に反対するデモをやり始めたことに端を発しています。その時はあんまりメディアに大きく取り上げられることもなく、特定秘密保護法も施行されてしまったわけなんですけれども、なんでこういうことが起きたんだろうというのを考えた時に、そもそも現状として与党の議席数が3分の2以上ある。ということは、数の論理で言えば、やろうと思えば何でも強行できてしまうという現状になっているわけです。得票数を見ると、野党だってそれなりの得票数はあるのに、小選挙区制の中では、野党があれだけ分かれてしまっていると、票も割れてしまって、結局、自民党が一人勝ちしてしまうという現状があるということが、だんだん見えてきました。せっかく野党に投じられた票も死票になってしまって、それが国会内に繁栄されにくいという現状があると思います。次の参院選でもこの現状が変わらなければ、次に待っているのは憲法改正の発議だろうと、私たちは考えました。

なので、その特定秘密保護法の活動を1回終わって、もっと広い 이슈で、いろんなことをやっていこうというふうになったときは、参院選に向けての活動を、ちょっと地道に、わりと静かに勉強会とか、シンポジウムとか、大学の中とかで、おとなしくやっていこうと思って、SEALDsというのを結成したわけなんですけれども、それが今年の5月3日のことなんですけど、その後、6月に国会の中で安保法制の問題が激しく議論されてくるようになって、これはもう参院選云々というか、今ここで止めないとうしようもないということになって、私たちはこの夏、もっぱら安保法制に反対するデモや街宣をやることになったという感じです。

野党間の選挙協力を呼びかけ

残念ながら安保法制はああいった形で強行採決をされたわけなんですけれども、私たちは全然あきらめていないので、次の参院選に向けて、野党間の選挙協力を呼びかけるというのをこの間ずっとしてきました。ずっとし

てきたと言っても、私は卒論を書いたりとかしてたので、あんまり動いてきたわけでは無いんですが、メンバーはそれをずっとやってきました。野党がこのままバラバラのまま、もう1回選挙されれば、同じことが起きてしまうわけですよね。もっとわかりやすい構図で選挙をしなければならぬし、リベラルの票を何とかまとめないといけないし、改憲が次に待っているということは、ぎりぎりでも3分の1以上、野党が議席数を取らないと、本当に改憲が現実のものになってしまうと思ったので、私たちはいろんな運動団体と協力をしながら、この間、統一候補を立ててくださいというお願いをしてみました。で、やっと先日、野党の党首会談において、次の選挙で選挙協力をするという合意に至ったということです。ただ、中央で合意されても、地方レベルでは、まだいろいろ調整が必要なもので、私たちは主に関西圏で候補者の調整ができませんか？というのを、テーブルを設けたりとかして、今、呼びかけているという感じです。

それ以外にやっていることは、もともと投票率がすごく低い、特に若者は低いという問題があるので、そのまま、今の低い状態のまま選挙をされてしまったら、そもそも声が反映されへんっていう人がでてくるということで、大学に投票所を設置できないかということ、選挙管理委員会と大学に掛け合ったりとかいうことをしています。参加した理由は9.11と3.11

次に私自身がどうしてこういう活動に参加しようと思ったか、という話をさせていただこうかなと思うんですが、こういう活動をしていると、ご家族はどう思ってるの、とか、親も社会活動してたんですか、ということをよく聞かれるんですが、うちの家族、全然そんなことなく普通の会社員です。母子家庭なんですけど、母はケースワーカーで地味に働いていて、家庭で政治の話が出るということもなく、ノンポリな感じでした。ただ、私にとってすごく大きいふたつの出来事があって、ひとつは9.11の同時多発テロ事件で、もうひとつは3.11の原発事故でした。

9.11があったときは、私は小学2年生か3年生ぐらいだったんですけども、何でこんなことが起きるの！？と思ってすごくショックを受けたんですが、もっとショックだったのは、あれだけの人が殺されて、すごく、こう、なんて言うんでしょう、大切な人を失う悲しみっていうのを知ったはずのアメリカが、今度は正義とか自由という言葉掲げて、対テロ戦争を始めたということでした。あんまり何も深いことはわからなかったんですけども、あのニュースを見ていて、暴力に対して暴力で報復したり、それを押さえ込もうとするというのは、確実に失敗するんだということ、まざまざと見せつけられた気持ちでした。しかも日本の自衛隊もあそこに、直接的に武力で加担したわけではないですけども、間接的にあれに加担するようなことをしてしまったっていうのは、幼いながら、イラクの子どもたちとかになんて謝ったらいいんだろうというぐらい、申し訳無いなという気持ちでいっぱいでした。

その後、私が今度は高校2年生から3年生に上がる春に3.11の原発事故が起きたわけなんですけれども、私、それまでは、何かこう、政府っていうのは絶対私たちに常に最善を尽くしてくれるものだっていうふうに漠然と信じていて、教科書に書いてあることは正しいだろうし、大人が言っていることはだいたい間違っていないと思ってたんです。あれだけ安全だと言われていた原発が爆発して、よく調べてみたら今までだってずっと危険性は指摘されてきたし、声を上げてきた人たちがいたのに、まるでそれが無いみたいにきちんと報道されることなく、私たちは真実を知らなかったんだ、ということを知って、ああ、本当の事っていうのは、しっかり自分で調べないとわからないし、政府は自分に都合の悪いことはあえて隠すことがあるんだなということを知りました。

それからはできるだけ批判的な視点でニュースを見ようと思って、新聞とかニュースを見ていたら、特定秘密保護法の問題が出てきて、あれが強行採決をされて、今度は集団的自衛権の行使容認をするという記者会見を安倍さんがしている、説明を聞いたって全然納得できるものじゃないっていうのを前にしたときに、自分には何ができるかなというふうに思って、行動したいなとは思ってたんですけど、私にとってデモっていうと、浅間山荘事件とかが浮かぶんですね。白黒のヘルメットをかぶって角材を持っているというイメージだったので、何かこう、友達とかがデモをやるんだ、みたいな話をしていたときも、ちょっと怖くなって思っていたんです。だけど、3.11以降のデモっていうのは、赤ちゃん連れのお母さんも参加できるような柔らかい雰囲気のものだったし、こういうのだったら私もできるし参加できるかなと思って、デモっていうのもひとつアリかもしれないと思い始めました。いざデモをやってみると、あいつらは過激だ、みたいなことを言われるわけですよね。私たち、過激に見られないようにはかなり気をつけていたほうではあると思うんですけど、だけど海外に派兵をして、戦争に加担することが普通で、路上で「殺さないで」って声を上げることが過激だとこの国で言われてるのだとしたら、これ、すごい狂ってることだなと思ったので、自分の意見を主張するなんてすごく当たり前じゃないですか。民主主義の国なんだから。それをもっと当たり前になるまで、当たり前の顔をしてやっていくしかないんだと思って、仲間たちとこれまでやってきた、という感じです。そろそろ時間なので終わります。(拍手)

中村研 (SADL)

こんにちは、SADLの中村です。

2015年9月19日、採決されたのかもわからない強行突破で、安全保障関連法案の可決が宣言されてしまった夜、僕は自宅のパソコンで国会中継と国会の外での抗議行動の中継を見ていました。最後のアホらしい茶番劇は、むしろ想像していたとおりでした。だけど僕は負けた気がしませんでした。夜が明ければ僕は京都のデモに参加していたし、

僕たちの行動が社会につながっていく強さを感じていました。

10年以上前、社会のうねりとは全然言われることのない小さな出来事でしたが、つながりの強さを感じた経験がありました。2003年3月20日、当時、大学生だった僕は、前日の夜から大阪のアメリカ領事館前にいました。アメリカ合衆国が主体となった有志連合がイラク戦争を始めるかもしれない。だけど大学の中にもこの話題は出てこない。そんなもやもやした気持ちで領事館前に行くと、同じような人がちらほらと集まっていました。段ボールに「子どもを殺すな」と書いてプラカードを即席で作ったり、年齢も性別も違うけど、どんな生活をしていて、なぜここに来たのかを話したりして朝まで過ごした記憶があります。その頃から僕は路上での出会いが始まり、そしてサウンドデモに関わるようになりました。クラブでDJをしている人とデモを企画して、グラフィティで反戦をアピールしたり、そうした出会いを通じて今の僕があるのだと思います。もちろんオーガナイズのメンバーは今とまったく違うし、社会の反響も広がりも、昔はあまり意識していませんでした。だけど僕は路上でつながる強さを作ってきたんだと確信しています。

SADL〈民主主義と生活を守る有志〉は、昨年2月、大阪市を廃止・分割する、いわゆる大阪都構想の住民投票から生まれました。それまでは「都構想って何なんやる？」とおぼろげにしか考えていなかった僕は、「都構想ヤバイやん！」とリアルに思うようになったのも、その頃だったと思います。4月から仕事が早く終わる日には、僕もSADLのリーフ配布に参加するようになりました。街頭でのリーフ配布は、ただ単純に住民投票に反対票を、と呼びかけるだけではありません。道ばたで気になっている、見ている人や、リーフを受け取ってくれる人に声をかけて、積極的に話しかけていきました。単に賛成か反対か、ではなく、住民投票のことで不安に思っている気持ち、迷っている気持ちを共有したり、僕たちも知らないことを教えてもらったりもしました。そしてリーフ配布で対話した内容をTwitterでつぶやいて、路上の声と一緒にSADLの行動を拡散していきました。そうした行動を通じて5月17日の住民投票開票に大阪市全体の雰囲気が変わっていくのが感じられました。もちろんSADLだけでなく、世代を超えた多様な行動が都構想を否決に追いやったのですが、街の中に僕たちの声を見せて広げていくことができたんだと思います。だけど半年後の大阪ダブル選挙では残念ながら同じようにはいきませんでした。

戦争法案に反対する行動でも、街の声を大切にしようとしてSADLは行動してきました。反対署名を集めるときは、自由に書き込める「ひとこと欄」をつけて、ひとりひとりの思いを国会に届けていきました。大阪で国会議員の事務所を回っていると、自民党の事務所からは党内での苦悩を漏れ聞くようにもなりました。この頃からSADLも毎月デモを企画するようになり、僕も本格的にSADLに関

わるようになりました。高校生たちのT-nsSOWL westや、SEALDs 関西との共催も含めて、7月19日、8月23日、9月13日とデモを行い、そのたびに僕はサウンドデモの音響機材を手配したり、デモの警備・誘導スタッフを募集したり、当日朝はサウンドカーの安全柵を設置したりしてきました。それと同時に他のメンバーはデモのコールを考えたり、プラカードを作ったり、SNSをチェックしては今、街頭で映えるアピールを追求してデモのクオリティを引き上げてくれました。

SADLのデモや街頭行動ができたのは、メンバーひとりひとりが様々なバックグラウンドを持ち合わせているからです。メンバーにはお母さんもいれば大学院生もいます。仕事も、建築、建設、流通、飲食店、医療、介護、団体職員、自営業などばらばらです。それに、ひとりひとりが多様な資源を持ち合わせています。たとえばバナーのデザインができる人、音楽に強い人、政治的な事情に通じている人、スピーチがうまい人、みんなのテンションがあげられる人、デモや街宣の裏方をしてきた人、Twitterで情報を発信できる人などです。さらにそれぞれの人間関係から、デモのバナーを持ったりコールをするサポーターを呼んでくれることもできました。つまりSADLは昨年に1から始まったのではなく、自分たちのライフワークで培った強みを持ち寄って行動しているということです。そして、ひとりひとりとは違う暮らしをしていても、生活を壊されていく不安、民主主義が形骸化する怒りこそが、お互いに共有できる接点だったのです。

僕がSADLにたどり着くことができたメンバーとの出会いは、3.11以降の路上にありました。メンバーで一番古いつきあいのフサエさんとは、お互いに反原発デモを企画したり、関電前抗議行動に参加させてもらったりしていました。次に古いサンナムさんとは、2013年頃からレイシズムのカウンター行動や、仲良くしようぜパレードで出会いました。それでもSADLの行動に関わりだした頃はメンバーの知り合いは2~3人でした。いくぴーさんはSADLの行動やそれまでのデモで顔を見かけたことはあったけども、あるとき音楽イベントで偶然に出会ってから初めてしゃべるようになりました。

今日ここで話させていただくにあたり、僕たちが一緒に行動できる基盤には何があるのかを考えました。SADLは戦争法や都構想では一緒に行動してきました。だけどマルチイシューになれば、ゆるやかに共通している意見もあれば、違いもしっかり確認していくことを大切にしています。僕たちは仲良しグループではなく、自分たちなら何ができるかを考えて、一致点を探る集団だと思っています。そうしたことができる基盤には、何がダサくて何がカッコいいのか、趣味やセンスをある程度共有できる信頼関係があるのだと感じています。そうした感覚を共有して作り出したのは、デモのコールやプラカだけではありません。街頭宣伝では、どんな背景がある人にどんな話をしてもらうか。トークイベントでは、どんな雰囲気を作れば政治に関

わるハードルを下げていけるかを考えています。また、ダブル選挙のときにネット配信した SADL TV は、短期決戦のイメージ浸透のためにかなりのクオリティを追求しました。

僕たちはそれぞれが違う個性を持ちながら、行動や体験を通じて感覚を共有し、メンバーひとりひとりをリスペクトしていく強さを持っています。それこそが路上で出会ってきた強さなんだと思います。

最後に、今日この場にきていただいた皆さんに伝えたいことがあります。僕たちはもともとバラバラです。だけど、出会いを重ねて行動してきました。またその時々により、一緒に行動するメンバーも入れ替わっていきます。生活環境が変わった人もたくさんいましたし、路上で行動を通して考え方の違いがわかる人もいます。だけど、機会があれば一緒に行動したいなって思える人が出てくるのも、やはり路上なのです。だからこそ、いつものメンバーや自分たちの話がわかるもの同士で動くのではなく、常に新たな出会いを求めて下さい。そして今の社会の空気を斜に構えて文句の言い合いに終わってしまっは、負けている感しかしません。「今の状況やバいよね」から「こんなことしたいよね、できるよね」という信頼関係を作っていくってほしいです。僕たちは街の雰囲気を変えていけないと勝てません。昨年の大阪で言うならば、大阪市の住民投票と大阪ダブル選挙の違いです。昨年9月19日のように、国会の中と外をつなげていくにはどうすればよいかを考えて下さい。自分たちがどんな声を大切に、どんな声を見せていくかを試行錯誤して下さい。

SADL は今年に入ってから CHAT4VOTE という選挙に向けた企画を始めています。難波の路上でおしゃべり感覚の街頭行動をしています。イメージは井戸端会議です。日常会話の雰囲気、政治の話を広げていくことを目指しています。わざわざ行動と銘打たなくても、職場で誰かと話すときのひとことでも、CHAT4VOTE はできるので、いつもは政治の話をしなない人でも、しゃべるときには CHAT4VOTE を試して下さい。誰でもできることで政治に関わるハードルを下げていこうと思っています。ひとりひとりができることはたくさんあります。今、何ができるか。ひとりひとりが考えて行動して下さい。SADL の中村でした。ありがとうございました。(拍手)

磯田圭介 (ANTS)

ANTS の磯田です。ANTS を作ったきっかけというのから話すと、「SEALDs さんには入れへん」、「学生もう終わっちゃったよ」、みたいな人、20代とか30、まあ40代の人もおるけど、そういうふうな人らが集まって結成しています。地元で、堺なんですけども、そういう地元、小さい範囲で活動する場所が無いよね、とか、そういうふうな若い子らを今までそうやってくっつけて、運動、活動、こういうふうな社会のことを話せる場所というのがまず必要やろうな、ということを考えて、それで気軽にみんな参

加してくれる、要は今言うてた戦争法、安保関連法を廃止させるための運動をみんなに広げていくという形で結成しました。

その中で、集まっている中の人は、いろんな気持ちの人や、カッコええからやってんねん、戦争反対や言うて何が悪いねん、言わんほうが変やろ、とか言うて、気軽に参加してくれる人とか、中にはマルクスがどうか、何かすごい古典がどうかこうとかって、僕、そっちに知識ないんでわからないんですけど、そういう人も中にはいたり、いろんな多種多様な人があって、でも、戦争反対やね、あんなことで国、民主主義っていうのが蔑ろにされるっちゃうのはおかしいよね、ということで、いろんな人で集まっています。そういう中で、身近な友達とか彼女とか、誘いがけして集まれるような場所っていうのを主に考えて、気軽に参加できるような形っていうのを僕ら考えて、ずーっと。僕はゆるい担当なんですけど。だからさっきからのみんなみたいな、ちょっと難しいことはしゃべれないんですけど、思いは一緒なんで、はい。

今、現に今やっていることといえばデモ。堺で、みんな住んでる人らに、どういうふうなこと、僕らなんて言うてるんかというのを知らせる必要あるよねっていうことで、1ヶ月に1回やりましょうっていうことで、6月からかな、ずっと1ヶ月1回。かなり辛かったです、僕的には。中にはメンバーで「もう2ヶ月に1回にしようや」という人もあったけど、やっぱそれはアカンやろ、と。ケツ割ったらアカンやろ、って、僕は若干言うたけど、ちょっと辛いなって思ったけど、もう寒かったんで、もうホンマに。25人とかでしなアカンときもあって、何これ、みたいに、なったんですけど、でもやってみたらやってみて、新しい人、来るんですよね。SNSとかで配信したり、「今日は行けるわ〜、クソ寒いけど」みたいなんで来てくれたりする人もあって。そこの中でひとりでもふたりでも会話、対話して、で「ANTS 一緒にやれへん？」言うて LINE グループ入ってくれたり、それとかあと、スタンディングとかも駅前とか毎日、みんなで LINE グループいっぱいやってやっていますけどね、そこで「今日、俺、30分だけできるわ」とか言うたら、「あ、ほんなら俺も行こかな」とか言うて気軽に参加できるような、そういうふうなんで、スーパー前での署名とかで、初めはね、僕も2筆とか、1時間やって3筆とかで、ちょっと情けないわあ、とか思うようなこともあったんですけど、今はもう慣れてしまっていて、1人20筆も集めれるようになってきて。その中で話したりする若い子ら、中学生とかとも知り合ったりするんですけど、「兄ちゃんら何やってんねん」と言うて、「俺らな、戦争反対や、言うてんねん」と言うて。「お前らも自衛隊入ってな、今の自衛隊やったら戦地いったりせんと、被災地とかでがんばってあんなんでできるけど、今度から話違うようになってくるんやで」とかいう話したら「マジ、カッコええな、それ」みたいな感じになって、それでつながって、その子 LINE 教えてくれて、グループ入って、「お兄

ちゃんら、そんなんやってんのや、俺らも行くわ」とか言うて、ピラまいてくれて「戦争反対してるんです」とか言うて、その子らのほうが署名めっちゃ集めてくる。おいィ、どうやってんねん！とかなって。そんなん、いろいろつながりも増えてきたし、僕らがやってることっちゃうのは、そういうふうな一般の人、そういう今の状況とか、声出していかなアカンよなっていう人、わからん人に対してつながっていく努力とか、そういうふうなことをしていかな、必要やな、ということで。

僕、今日は、ゆるい担当で来たんですけど、もうぜひ今度呼んでくれる人はマルクスとか詳しい、資本論とか3時間ぐらい、たぶん話できる人もおるんで、今日は、ごめんなさいね、僕、ゆるい担当で来たんで、こんな話しかできませんけど、ぜひ、みなさんもちよつとずつやっただけで変わっていくと思えますんで。いっちゃん初めの時やったらね、ほんまに言葉、悪いかもしれへんけど、海にシッコしてるみたいな感じやったんですよ、ホンマに(笑)。もう、でも今やったらね、スーパー前で、何回か、4回か5回していくうちに、「お兄ちゃんら、がんばってんなあ」言うて、やっとな、プールにシッコしてるぐらいになってきたんです(笑)。差し入れまでくれるんですよ。ほんで「お母ちゃんもな、家帰ってお父ちゃんに言うて」言うたら、「わかった、言うわ」とか言うて。そういうのでね、だんだん、だんだん、そういうふうな、地域とかにも根ざした、そういうふうな活動っていうのは必要ちゃうかなと思って、僕らこうやってやっていますんで、またぜひ、難しいこと言えないんで、今度またええ人、呼んどきますんで、よろしくをお願いします。(拍手)

橋口昌治 (AEQUITAS 京都)

AEQUITAS 京都の橋口昌治と申します。AEQUITAS ですね、エキタスと読みます。ラテン語で、「公正」とか、「正義」とか、そういうことを意味する言葉です。主張としてはメインは「最低賃金を 1500 円に引き上げる」ということを求めています。それに付随して「中小企業に税金を回せ」とか、あるいは「経済にデモクラシーを」といったようなことを言っています。東京にも AEQUITAS っていうのが去年できて、それで先日、AEQUITAS 京都になりました。2013 年の末ぐらいから、京都で最低賃金を上げる運動をやっついてこうかなというような話を、本格的に 2014 年からそういう運動をやっていました。最初の団体名は「最賃 UP!UP! 京都」という名前でした。今でもその時の印象が強いのか、AEQUITAS 京都と名前を変えても「ああ、最賃 UP か」とか言われるんですけども。その次に、ちょっと名前を変えようということになって「自由最賃同盟」という名前になった。これは今、お配りしているピラ、リーフレットみたいなものが、自由最賃同盟のときに作ったものです。先日、東京のほうで AEQUITAS 盛り上がってるってことなので、じゃあ、AEQUITAS 京都に変えようかということで、3 つめ

の名前で、AEQUITAS 京都になったのが今年ですね。つい先日になります。なので結成時期としては 2013 年ぐらいになります。どのぐらいの人数でやってるかっていうことなんですけども、ML には 7 人とか 8 人ぐらい入ってるんですけども、実質的には結構、自分ばかりやってる感じで、みんな、それぞれ反原発運動とか、それぞれのユニオン、労働組合の運動が忙しかったり、いろいろ個人的に忙しくて、なので僕がいろいろ頼んでやってもらっているというような状態です。

なので現在、直面している困難や悩みはちょっと人数が足りないということですね。これはあまり東京のほうには言っていないことなんですけど、まあ、がんばってますよ、って言ってやっています。

目的ですね。先ほど言ったように、最低賃金を 1500 円に引き上げるということを謳っています。その内容というのは、詳しいことはお配りしてあるものを書いてあるんですけども、個人的には、1500 円という数字、も、大事だと思っています、もちろん。そういった額にして、特に非正規労働者が増えている中で、生活の底上げのためには必要なものだというふうに考えていますけども、このリーフレットのトップにも書いてある、「もしも最低賃金が 1500 円になったら」というように、想像することですね。長年、特に非正規労働者が賃金が安くて当たり前だと。正社員と同じ仕事をしていても、パートだからという理由で、正社員はおるか、パートさん自身も、正社員の人たちよりも賃金安くても仕方無いねっていうふうに思ってきた現状があると思うんですね。なので僕らが最低賃金を 1500 円に上げようかって言うと、高すぎるというようなことを言われるわけですね。いや、そんなこと無いですよ、計算してみてくださいよ、というような話をしていく。その反応ですね。まず反応があって、そしてそこでいろいろ話をするとということを通して、「じゃ、おかしんじゃないか」とか、「もっとこういう生活があり得んじゃないか」と。「こんなに困らなくても、そんな心配しなくてもいい生活があるんじゃないか」というようなことを、やっぱり発想を変えてもらう、意識を変えてもらうということが、やっぱり大事なというふうに思っています。だから、例えば Twitter とかで言ったのは、総理大臣が選挙目当てに最低賃金なんぼぐらいにするぞって言って、官僚がそれで何かやるのももちろん賃金があがって良いかもしれないけども、やっぱり運動して、そしていろいろあって、やっとな上がったというほうがやっぱり意味があるというふうに思っています。そういう意味で「経済にデモクラシーを」という、これはスペインのポデモスという、最近躍進して日本でも結構知られるようになってきているようなグループが言っていることなんですけども、「経済にデモクラシーを」ということをひとつに考えています。それは具体的にはそうやって、この 1500 円にしようということをつけかけにお話を、そして生活に対する、あるいは労働に対する意識を変えるということと、それを政治に結びつけて、

新自由主義でしようがない、だってもうこの道しかないでしょ、みたいな感じで言われることに対して、いやいや、そうじゃないよ、と。で、ばかばかしいとか、そんなこと無理だよ、というふうに言われるようなことも、いや、そんなことない、というふうに言うていくということを運動としてやっていく。それを「経済にデモクラシーを」という言葉で言い表しています。

もうちょっと時間があるようなので、お話ししますと、面白いなと思ったのは、前半と後半にわかれていますね。で、労働系が前半で、平和・民主主義系が後半だと。はじめ見たときには、あれ、自分たち、最賃のことやってるし労働系なんですけど、っていう感じだったんですけど、運動形態が違うでしょ、それで分類してみましたって言われると、ああ、なるほどな、と。むしろ僕らが言っている「経済にデモクラシーを」という主張にあらわれているように、確かによく見ていただいているなというふうに思いました。どういうふうが違うのかという説明を伺ったときに、後半のほうは、路上のほうでよく活動されていますよね、というところが違うんじゃないかと。前半はそういう会社との交渉とかをして。自分も普段は「ユニオンぼちぼち」という組合で交渉してるんですけども、今日はAEQUITASのほうで呼ばれているのでその話をしていますけれども。路上でやるというのが違う、ああ、なるほどな、というふうに思いました。ただ、これは次のディスカッションのあたりも関係してくるかもしれないですけども、要は職場なり、あるいは大学といった拠点になるようなところで、どのぐらいのことができているのか。路上でやるということの重要性は自分もよくわかっているんですけども、どちらかという自分にはユニオンの活動をしていて、なかなかやっぱ職場に食い込めない、と。そこにいて、賃上げなり交渉をしても、組織化というのができないなということを感じていたところで、路上に出ていっているという、ちょっとネガティブな側面もあるわけなのですよね。そのネガティブな面をなるべく肯定的にもっていききたいな、と。つまり最低賃金という形で、職場での交渉では実現できない賃上げを勝ち取れないかと思っています。なので、活動形態の違いからは、そういうふうな議論も展開できるのかな、というふうに思いました。なので、AEQUITASのほうを平和・民主主義系にわけていただいて、なるほど、いろいろ考えて、そこから本当にみなさんと議論できること、いろいろあるなというふうに思いました。

ちょっととりとめのない感じになってしまうんですけども、自分たちの意識としては、ユニオン・労働系のお話と、路上でできた民主主義の運動を混ぜていきたいねという話は東京の人たちもしているの、そういう意味でも今日、興味深いお話をいろいろ伺いましたし、これからもディスカッションできればというふうに思っています。以上です。(拍手)

清水 橋口さん、ありがとうございました。それではここで10分間の休憩を挟みたいと思います。休憩の間に質問用紙を集めます。質問がおりの方は、この司会テーブルまでお願いします。また、会場後方において書籍の販売もしておりますので、そちらもよろしければお買い求め下さい。

<第2部 リレートーク>

清水 それではただいまから、リレートークしていただいた皆さんによるパネルディスカッションに移りたいと思います。司会・コーディネートを務めますのは、岩城穂弁護士です。よろしくお願いします。

岩城 皆さん、こんばんは。今日は記念講演なども無く、7団体の人たち全員からお話を聞くということで、今までに無い初めての企画です。まず、いくつか私のほうで考えて、事前に少しだけ打ち合わせをした論点なんですけども、ひとつは今の若者の皆さんは各団体の中で、どういった意見交換とかコミュニケーションをとっているのか。時には意見の対立もあるんじゃないか。役割分担について、どんな工夫をしているのか。特に、何百人と大きな数になってくると、いろいろそういう苦勞も出てくるんじゃないかといったことを聞いてみたいな、と。今日お聞きしたら、数人でやってるところもあれば、非常にたくさん的人数で、それも全国にいくつも団体があると、ネットワークを作っているというようなところもあるようなので、一律に議論は難しいと思いますが、数が多いところで苦勞しているところを中心に、少しご意見をいただけたらなというふうに思います。

手始めにSEALDsの寺田さんあたりから少し切り出していただけませんかでしょうか。

寺田 (SEALDs 関西) はい、組織内のコミュニケーションの取り方、SEALDsは組織ではなくて、入会・退会の手続きがあるわけでもなければ、会の決まりみたいなものがあるわけでも無いんです。暗黙の了解としては、暴力で革命を、と思ってる人とは絶対に一緒にできない、というぐらいで、後はホームページに「私たちは立憲主義を守る政治を求めます」とか、「対話と協調に基づく安全保障政策を求めます」とか、そういうことが書いてあるので、それに賛同できれば基本的に誰でもオープンな感じで、いつ入っても、いつ抜けてもいいし、私もメンバー全員の名前と顔は全然一致していないという感じです。

ミーティングとかをするんですけども、その中であんまり意見の違いで対立したりとかっていう経験は、今のところ無くって、というのも、あんまり「自分がこうしたい」みたいな思いをみんなが持っているというよりは、今の現状を変え、効率的に変えるには、何が必要かという議論になるので、そこは基本的にずっと合意できることが多いか

なと思います。

で、昔の学生運動と少し違うかなと思うのは、生き方とか、その人のアイデンティティにまで踏み込んだりとか、「こうすべき」みたいな議論を熱くするというよりは、「それぞれバラバラでいいじゃないか」と。ただ、この一点だけは共有しておこうというところが同じであれば、もうそれに向かって、やることは1つだよな、っていう感じで、わりと淡々としています。議論が白熱するみたいな経験はあんまりなくて、淡々とやるべきことを決めて、それをやって進めていくっていう感じかな、と思います。リーダーもいなければ名簿も無いという感じです。

岩城 SEALDs というと、国会で発言された奥田（愛基）さんというのが、全国的には有名になっていると思うんですけども、代表という人はいない、と。副代表がたくさんおる、みたいな話をきいたことがあるんですけども、そのあたりはどんな感じなんですか？

寺田（SEALDs 関西） 代表が誰ですか？って聞かれたら、もうみんな「私だ」って答えよう、とか言っています。つまり誰か司令塔がいて、それに従っていくっていう形態ではなくて、民主主義の名、自分の責任において、自分の意見を、自分を主語にして言っていこう、みたいな。「我々は」ということはあまり言わないで、「私はこういう理由で反対する」という感じですね。みんなが代表っていうような認識でやっています。

岩城 はい。昔の、ギリシャ時代の直接民主主義みたいな感じですね。他の団体の方はどうですか？ コミュニケーションの取り方とか、苦勞してる話とか。ちょっと積極的に言ってほしいんですけど。

磯田（ANTS） 僕のところも、一応、ちゃんとした数も僕もわかってないんで、50人が60人ぐらいおって、実際じゃあ運動、ここで何かしますよ、っていったときに、暇なやつが来る、みたいな、時間あるやつが来る、やりたいやつが来る、みたいな形で僕らはさせてもってて、だから「ここでしますよ」って言うて、手を上げる人も、LINEとかそういうものを使って、決められた日っていうのは、デモとかスタンディング、ここで定期的にしましょか、とかっていうのは、ある一定ありますけど、もうホンマに「俺、仕事終わりにちょっとできるわ、やるか？」とかいうので、主にやってたり。

意見が違うというのは、とりあえずこの戦争反対、この戦争法というのがあって、それに反対してくれるんやったら一緒にしようよって。もうこれだけやん？って言うて。他のことではいる、「もっとみんな知ったほうがいいよ」とかって言う子もおるけど、それは置いて、とりあえずゆるくつながっていく係なんで。そんなマルクスがどうかというたかて絶対来いひんで！って言うて。そんなん、

勉強の勉強しなアカンわ、言うて。そんなんなんで、もうホンマにゆるくつながって行って、この戦争法、誰も殺したらアカンよな、というモラルとか、そういうふうな一点でつながってるかなっていう感じなんで。友達とか誘って何が悪い？ 昔の知り合いに会ったら何かちょっといいにくいな、顔さすな、とかあったけど、それを取っ払おうや、というような形で、運動というか、こういうふうな活動をさしてもろてる感じですね。

岩城 はい、今の、よくわかりました。我々の感覚ですとやっぱり、ちょっとこの人、苦手やな、とか、この人来たらまた全体を仕切る、とかね。苦手な人中中にはいたりするかなと思ったりするんですけど、排除したり競い合ったりみたいなことっていうのは、みなさんあまり無いんでしょうか。今の若い方はすごく上手にその辺、棲み分けるとか、そんな感じなんですかね。

北村（関西学生アルバイトユニオン） 僕らは、めっちゃ喧嘩しますね。というのは、相談者の方が来て、どういうふうな解決していくのかっていう方向は、ちゃんと全体として、ひとつ出さなければならぬだろうなと思いますので、みんな頑固っていうか、自分はどうしたい、っていうのがあるんですけども、そこらへんは、喧嘩すると言っても別に殴り合うわけではなくてですね、普通に会議の場でどうしようかってみんなで頭悩ませるっていうことは結構多いですね。それは、全体の活動の方向性とかもそうですし、ひとりひとりの相談者への対応とかも、良くも悪くも結構、時間がかかりますね。もちろん広いつながりはすごい大事だなと、うちのユニオンの中でも必要だと思うんですけども、たとえばひとりひとりに向き合うときとか、どういうふうなやっていこうかっていうときには、時間をかけて、あ〜って言いながら、何時まで会議やってんだよ、とか言いながらやっています。まあ、まだ人数が少ないからできるっていうのはあると思うんですけどね。

岩城 ちょっとここでね、いくつか質問が出てるので、この質問用紙に書いてもらったことを少し聞いてみたいと思います。

『SEALDs、SADLの方へ。サウンドデモで、私たち50代60代はリズムに乗れなかつたりするのです。そういう昔の若者、真面目な活動をしてきた私たちへのアドバイスがあればお願いします。』

ちょっと興味深い質問なんで、SEALDsの方とSADLの方、ひとりずつお願いします。

中村（SADL） じゃあ、SADLのほうから。僕自身は結構、10年以上サウンドデモに関わってきたんですけど、別に、サウンドデモじゃなくてもいいじゃん、って思ってるほうで、それぞれの世代にそれぞれのやり方があると思うんですね。それで今、CHAT4VOTE（選挙についておしゃべ

りする運動)とかもやったりしているし。僕、世界のいろんな音楽を漁るのが好きで、日本にも盆踊りっていういい音楽があるんですよ。僕の友達が盆踊りとレゲエをミックスさせたりとかして、そういうのも楽しいです。別に僕らの世代が、僕も SEALDs みたいにラップ調がそんなに乗れる世代でもない。もう 30 超えたし、そんなに若いこともできないんで、それぞれの世代にそれぞれのやり方があるはずなんです。もちろん僕らのデモに来ていただいた時は、一緒にやっていきたいと思うんですけども、ぜひ、俺、こういうのできるよっていうのをもっともっと発信してほしいんですよ。そういうところから一緒にできないかなとは思っています。

寺田 (SEALDs 関西) だいたい思ってること言っていたんで同じなんですけど、何か私も、今までずっと運動を着実にされてきた方のことは本当にみんな尊敬をしていて、今までのやり方がダメだった、とかってことではないんですけども、何か最初、デモとか行ったら「シュプレヒコール！おー！」みたいな感じで、「なんとかを許さないぞー！」みたいな感じで、あんまり普段使ったことが無い、共闘とか連帯みたいな言葉が出てきて、何か、それやらもうちょっと、自分たちが普段、使ってる言葉でやってみよう、みたいな感じで、慣れ親しんだ音楽と、それに合わせたコールみたいなのをやってみたら、意外としっくりきたから続けてるんです。それぞれの世代のやり方が私もあっていいと思うし、別に私たちが新しいとかいうわけではなくて、高校生のコールとかもっと速いですし。それぞれの世代が世代にあったやり方をして、でもこう、つながりつつ、選挙に向けては全世代が選挙権を持ってるわけなので、つながれるところでつながってやれたらいいなと思っています。

岩城 ありがとうございます。やっぱり SEALDs と SADL の方に質問が多いんですけども、ちょっと両方の方に質問なんですけどね。

『今、一番の悩み事は何かですか。』

漏れ聞いていることがふたつあります。ひとつが、いろんな団体の集会に出て、しゃべってくれという依頼をされたりして、疲れてないですか、ということだと思うんですけども、疲れている人もいるんじゃないですか、ということ。それから、右寄りの人からもデマや中傷を言われたり、逆にリベラルな人とか、そういう方からもいろいろ言われたりして、疲れているんじゃないですか、という心配をされた質問がふたつの団体に出てるので、少しまたコメントをいただいていいですか。

寺田 (SEALDs 関西) SEALDs としての一番の悩みは、やっぱり選挙協力に関するいろんなしらがらみがあるということですかね。共産党アレルギー、民主党アレルギー、それぞれあって、もう今、リベラル勢で割れてる場合じゃな

いよっていうところで、やっと前に進んではきたんですけど、でもまだイデオロギーの違いとかで、ちょっと揉めていたりして、すごくそれって大切なことなんですけど、今、何が一番必要で、どうすれば私たちの声を反映できるかという点において動いてほしいなという思いはあります。

いろんな団体の集会に出て疲れないか、は、疲れる時もありますけど、やっぱり学業とか私生活を優先しようと思っていて、運動に身を投じてしまったら、ほんとに何のためにやってるのかわからないので。そのへんは私は結構、メンバーにも悪いなと思いつつ、嫌やと思ったらすぐに抜けたりします。

インターネット上を見れば、右寄りの人からのデマや中傷、逆にリベラルな人からのデマ・中傷、罵詈雑言がたくさんならんでいるわけですし、逆に今まで旧来の運動をしてこられた方から、生ぬるいとか、逮捕されるぐらいの覚悟がないと運動やったらあかんとか、あるんですけど、やっぱり裾野を広げる上で、そういうふうになってしまうと本当に運動が一部の人のものになって、民主主義なので全員が参加しないといけないというところにはかないので、そういう言葉は気にしないようにしています。

中村 (SADL) 悩み、もう本当に個人的になるんですけど、結構忙しくて、最近観たい映画がたまっているというのが一番の悩み。後、読みたい本が、買ったけど読んでないという。もうちょっといろいろ個人的な生活を充実させたいなというふうには思っています。

僕は、たぶん SADL の中で一番 SNS を使わないほうなので、あまりそういうネット上の誹謗中傷を直接受けていないほうなんですけども、デモの整理とかをしてみると、本当に結構いろいろ、「今日のデモは旗とか幟とか、お控え下さいってここに書いてますよね」みたいなことを言いながら、会場でたたくでもらうとか、結構行く前に「あー、ひと仕事おわった」みたいな、そんな感じになったりもしますし、まあ長年やっていると、一緒にやってきたメンバー、3.11 以前のほうなんですけども、やってたような友達とも「お前のやり方は違う」みたいなことを結構言われたりもします。ただ、まあそこはもう、できるだけ徹底的に話していくことにしてるんですけど、なかなか回らなかつたりっていう悩みはありますね。

集会に呼ばれて、ということなんですけど、SADL は結構そのへん冷たくて、すぐ断ったりとかも最近はするようにしているので、そのへんは実は、他の団体、聞くと 50 人もいってびっくりしたんですけど、実は SADL は、LINE 見ても 15 人しかいなくて、結構メンバーは少数なので、無理だったら無理というふうにははっきり言うようにしていかなきゃいけないかなというふうには思っています。

岩城 ありがとうございます。次に学生関係で北村さんと坂倉さんに質問です。

「自分たちの活動が学内でどのように受け止められているんでしょうか。それを知らせるために、どんなことをしていますか。周辺の大学などに働きかけなどはしているんでしょうか」という質問です。両方とも一言ずつお願いしたいんですけど。

北村（関西学生アルバイトユニオン） さっき学内でやっていきたいという話をしたんですが、基本的にはアンケートをとったりとかいうことをしているんですけど、去年はそれが足りなくて、学内で相談を呼びかけるピラを1回もまいてないっていうのは、大学の中でやるユニオンとしては赤っ恥丸出しだろっていう話です。なので来年からは、月1回ぐらいの形で相談会のようなことをやっていけたらなと思ってます。そう言うても学内でピラまけないんで、先生にお願いして、アンケートをとらせてもらって、そういう中で、皆さん、こういう問題が出てきて、ひとりじゃないんだぜ、っていうことを伝えた上で、ちゃんと相談に結びつける形を取れたらなと思っています。メンバーが大学でもいくつか偏っているので、周辺の大学には行けてはいないんですけども、なかなか。まず相談をやって、人数が増えてきたら、うちの中だけじゃダメだろっていう声が出れば自然に出てくるのではないのかなと、ちゃんと地に足をつけて、来年はやっていけたらいいなと思っています。なかなか学内で、労働相談に来るって、どういふふうに見られてるのかっていうことと関係すると思うんですが、なかなか相談に来れない、というか、来てもらえないですね。それこそ「しんどいのが当たり前」っていうのが蔓延している状況の中で、どういふふうにはそれはおかしいことなんだということ、で、相談して解決するっていうのは普通のことなんだということ、を、まず伝えていけるのか。語り口や宣伝の仕方など、まだ悩み中ですけど、工夫の余地がある部分なのではないかなと思っております。

坂倉（POSSE・ブラックバイトユニオン） ブラックバイトユニオンというのはですね、相談に来る方も学生なんですけれども、ひとつあるのは、大学をあまり基盤としていないところだと思うんですね。高校生もいるんですけども、高校、大学といった学校を基盤としない学生の運動というふうに言えるのかなというふうに思います。実際、相談も、ほとんどネットで見てくるんですね。私たちは先ほども言いましたけど、毎日10件20件の相談が来るとは思いますが、だいたいどうやって来るのかというと、ネットでとりあえず「ブラックバイト」というのを検索する。「ブラックバイト 相談」ぐらいで検索すると、もううちのブラックバイトユニオンのホームページが上に出るんですね。名前勝ちみたいな話なんですけれども、それで、ああ、じゃここに相談したらいいんだっていうことで相談に来られるという形で、しかも来られる方も、全国から来るわけですね。北海道から沖縄まで来ます。やっぱり首都圏とか、そういう東京とか大阪とか、そういったところは多

いですけども。なので、実は地域的な限定とか、学制的な限定みたいなものは無いんですね。ただ、実際その相談に来られて、特に東京とか大阪とか、あるいは仙台とかに、私たちは拠点があるので、そのあたりがどうしても中心になってしまうんですけども、そういったところにいる人たちと一緒にやってはいるので。その3つの地域を中心に、ネットでつながるような人たち、ネットを通じて相談をいただいて、実際に直接お会いして、そこで一緒に組合としてやっていこうという形で闘っていくというモデルが僕たちの割と典型的なパターンなのかなと思います。

岩城 ありがとうございます。ちょっと個別の方に対する質問になるんですが、今、このときにしないとできなくなっちゃうんで。

『ANTSの方へ』というのがありまして、『署名がたくさん集められるようになったのは、どういう努力や変化があったのでしょうか』という。先ほど最初、1時間で3つぐらいだったのがたくさん集められるようになったというお話があったと思うんですが、どんな工夫をされたんでしょうか。

磯田（ANTS） やっぱり一番の努力は、スーパー前とかでやる、通っていく人に渡すんじゃなくて、自転車を停める瞬間に行くとか、荷物置いた瞬間に行く。それとか、出てきた人。購買意欲がもう満たされた人にやってもらったら、そういうふうな形になる。まあ、でもこっち側の気持ちがいっぱい一番大きいかと思います。声かけたらやっぱり「お兄ちゃんら何なん？学生さん？ニート？」みたいな感じで言われて、働いてますよって。大丈夫ですって言って。「こんな時間にどうしたん？」、「もっと働き」みたいな感じで言われるんですけど、そやけど、まあこういうふうなんで、実は僕もちゃんと5時半まで働いて、できるときはこんなんやって、署名活動してんねん、というふうな感じで言うたら、結構おばちゃん書いてくれて、おばちゃんとかおっちゃんとか。駅前とかでもするんですけどね、信号待ちの人を捕まえたり。こんなんやってくれへんのと違うかなと最初思ってたんですよ。そやけど、声かけたら意外と反応ええし、初めのころは、こっちも声小さくて聞こえにくかって、「何言うてんのアタタ」みたいな感じやったんですけど、だんだん自分のやってることに対して自信も持ってきたし、ああ、みんなこういうことに対してやっぱり関心持ってるよな、っていうのを感じてきたんで。メンバーの子らも積極的に「私、今日ひとりでした」とか、いや、ひとりまずいやろ、みたいな。やっぱりこっちの気持ちの問題が大きいん違うかなというの思いますね。

岩城 今日、参加者の皆さんの中には署名活動とかもね、取り組んでおられる方もあると思うので、悩みは共通という。自転車止めた瞬間とかって面白いですね。

ちょっと深い質問というか、民主主義とは何か、みたい

なのに関わる話なんですけど、寺田さん宛の質問で、『民主主義というのは教育を受けた人とか、余裕がある人の有利な制度という面があるんじゃないか』と。あまりそういうのに恵まれていない人たち、あまり表へ出てこない人たち、『サイレントマジョリティの人たちの日常の痛みみたいなものを知る上で難しさを感じるようなことがありますか』という。ちょっと難しい質問かなと思うんですけども、そういう世の中であまり表へ出てこない人たちとのコミュニケーションとか対話をどうはかるのかという質問だと思うんですけども、何かご意見ありますか。

寺田 (SEALDs 関西) 私自身もそれはよく考えることであって、私も奨学金をもらいながら何とか大学に行っている感じで、母も非正規雇用で福祉の職場で働いているので、そんなに恵まれたほうではないですけど、大学まで行くことができ。私も地元が堺ですけど、もうちょっと南のほうで、清原が最近逮捕されたより南のほうで、すごいガラも悪いし、そんなに治安がいい地域じゃないので、友達とかも中卒で働いてるような子がたくさんいるし、その中で子どももできて一生懸命働きながらっていったら、「新聞読む時間なんか無いわ」とか、「面白いバラエティを仕事終わりに見たいし、そんな話されても」みたいな友達も結構いるし。あと、釜ヶ崎っていうところ、私も炊き出しの手伝いとかを毎週しているんですけど、そういうおっちゃんとかと話していると、実はすごく置かれてる状況って政治的な問題だけれども、政治的なことに思いをさくような状況じゃないっていうのとかも見てきて、ああ、すごく難しいなと思ったりはします。ただ、できるだけそういう人と対話することとか、足を運ぶことは大事にしたいなと思う一方で、私は政治家でもなければ政党の関係者でもなくて、ただ一市民として声を上げているだけなので、私がおの人たちの声を拾って、SEALDs がそういう人たちの声も拾って代弁できているか、できてないか、みたいなことは問題ではなくて、私は自分も当事者として声を上げたいし、自分が見聞きしたことは、代弁して言えることは言いたいなと思っています。

岩城 ありがとうございます。ひととおり概略的ですけども、質問はできるだけ取り上げたつもりですけども、何か今の話で関連して、会場の方からご質問とかありますか？

坂倉 (POSSE・ブラックバイトユニオン) 今の寺田さんのお話を聞いてて思ったんですけども、僕らは労働問題とか貧困問題に取り組んできているわけですけども、実際に街頭での活動をやってとか、あるいはその中で、今回言えば平和と民主主義をめぐるいろんな取り組みとこのうがあると思うんですけども、やはりそういったときに労働問題、貧困問題を抱えてる人がやっぱり参加しづらいという問題があるのかなというふうに思ったんですね。ただ、

その労働問題、貧困問題ってというのは、結局それも民主主義の問題だと私は思うんですね。実際、どういうところで働いている、例えば全然給料が払われないとか、本当に長時間働かされてしまっているとか、パワハラに遭ってるとか、あるいは賃金が非常に低いとか。そういった問題っていうのが日常にあると思うんですけども、労働問題とか生活の問題というのは本当に誰もが経験する、本当に日常生活の問題だと思うんですけども、そこもひとつの権利行使の場であって、人権とか民主主義とか言ったときに、特に人権とかっていう言葉だと、誰かかわいそうな困ってる人がいて、そういう人たちを助けなければ、というふうに考えられがちなところがあると思うんですけども、その職場とか、そういうところの問題っていうのは、そこそ一番、ある意味、基盤的なというか、誰でも目にするような民主主義とか権利を行使する場なんじゃないかなというふうに思うんですね。そうしたときに、やっぱり街頭に出て、平和の問題とかっていうことを言う基礎というか、その前提というか、そこにやっぱり労働問題、貧困問題でも、権利を行使して、そこで民主主義を実現、足下のところから民主主義を実現していくっていう、そういう取り組みが実は必要なんじゃないかなと、私としては思うんです。ちょっと論点を提示できればなと思ってお話ししました。

岩城 ありがとうございます。じゃあ、北出さん。

北出 (地域労組おおさか青年部) はい、その民主主義の根幹が何か、ということなんですけども、やっぱりいろいろ勉強しないと本当に政党や世の中のことがわからないというのが一番大切な問題、根幹にあると思います。今、問題意識を持てるのは、現役世代の労働者は問題意識を持てるための時間が圧倒的に足りないんじゃないかということですね。朝早く起きて、夜帰ってくるのが9時か10時になると。それで1週間が終わってしまう。土日のうち1日はもう寝て終わって、1日自分のことをすれば、それで1週間が終わってしまうって、これではどんな運動に参加することもできないと思うんですね。ですから労働運動はこれまで賃上げ中心に行われてきたかもしれませんが、でも労働組合、あるいは労働運動は、もっと時間短縮、労働時間の短縮にもっと力を入れるべきだし、それこそが平和運動であったり、立憲主義の運動、あるいは福祉の運動、すべての運動につながる、すべての運動の根幹につながると、私はそう思っています。働かなければ生きていけない以上、労働運動というのはすべての運動の根幹だし、それが立憲主義や平和や福祉の問題ともつながっていく、民主主義の問題ともつながっていると。そしてそのことを進めることが、大きく世の中を変革、変えていくことにつながるんじゃないか。そこに大きな可能性があるかと、私はそんなふうに考えています。

中村 (SADL) 僕は今日、SADL という立場で来たんです

けども、会場にいる何人かの方はご存じかもしれないですけど、僕もユニオンの相談スタッフをやっているという立場です。こういう SADL なり、いろんなデモとか行くと、そんな話もするとですね、結構、飲み会で、実は僕の職場でどうの、とか、酒を飲んでから相談はちょっとしんどいな、といったようなこともあるんですけども、実は結構、こういうデモに参加したりとか、オーガナイズしてるメンバーでも、結構、生活が半端なくひどかったりとか、SADL のメンバーでも、結構、職場ブラックよね、っていう人はたくさんいるんですけども、みんないろんなバックグラウンドがあると思うんですね。その中で、職場の中で何かできる可能性がある人は、どんどんそれをやればいいと思うし、逆に自分のやり方としては、こういうふうな路上に出てくるというふうなやり方をやられる方もいるし、いろんなやり方があるので、僕はそういうのはすべて、やっぱり尊重していくというか。ひとりひとりがどういうふうなバックグラウンドを持って、そこに参加しているのか、どんな思いがあるのかを、ひとつひとつ大切にしていけるのが民主主義かな、と思っています。

岩城 AEQUITAS 京都の橋口さん、ちょうどそういうユニオンの話と、平和・民主主義の問題と運動形態が共通とか、職場からちょっと逃避してるという話もあったんですけど、今の点で関わると思うので、少しご意見をいただけますか？

橋口 (AEQUITAS 京都) 民主主義と言った場合に、選挙ですね。でも選挙は有名な、誰が言ったのかちょっと忘れたんですけども、数年に1回だけで、その時だけの民主主義だと言われるようなこともありますし。デモも、どちらかというところと非日常的なところに出て行って、訴えをすることで。それに対してやっぱり日常的な民主主義の場として、自分の中では職場だというような言い方をしているんですけども、先ほど言ったように、今日来ている、ここに並んでいる団体のほとんどは、職場を拠点にした組合とか、学校を拠点にした活動ではない。それは良い意味、積極的な面もあると思うんですね。そういう中で、私は労働運動の活動をしてるんですけど、労働組合がすべての運動の根幹であると、理論的には言えるかもしれないですけども、社会に対して堂々と言えないようなところもあります。それは歴史的な状況、それから今の現状を生み出している労働組合のあり方が有ると思っています。そこをどうするのかというのは、自分の課題でもあります。今の運動や政治とか経済が抱えている課題だというふうな思っています。なので、そういう意味では、路上でいろいろやっていることと、そうした拠点になるような中間団体と言われるようなところを、どう動かしていくかっていうのを、たぶんみなさん、いろいろ、あちこちで頭抱えながらやっていたらいいのかなと思っています。以上です。

岩城 はい、ありがとうございます。どうぞ、お願いします。

北村 (関西学生アルバイトユニオン) 今、基本的に、どういうふうな時間を作るかだったり、どこが運動の拠点になるかっていうことなんですけれども、個人的に思うことを少しお話をさせていただきますと、僕も釜ヶ崎で活動してるっていうふうに言いましたけれども、何年も行ってたら話しかけられることが多くなりまして、何か、服装がなじんできたの、よくわからないんですけども、で、生活保護を受けてたんですけども、橋下になってから切られて、って話してくれた人がいて、やっぱり僕らが知らないことをいっぱい知ってるんですね。相談を受けて、一緒に労基署とか行ったりするんですけども、やっぱり自分のことなんで、僕らより詳しくあったりとか、ちゃんと調べてたりとかいうことも、恥ずかしいお話なのかもしれないんですけど、あつたりするので、あ、そうか、日常の中で考える土壌っていうのはいっぱいあって、議論はあるいは起こっているのだろうと。でも、それを発する場所っていうのがなかなか見つからないのが現状なのかもしれないなと思いました。

そういう中で、今回は安保法という形で、すぐ国会前とかに人が集まりましたけれども、そういう場所に行くっていうのはひとつのきっかけなのかもしれないし、あるいは僕たちみたいところに相談に来てくれるっていうのがひとつのきっかけなのかもしれないんですけども、政治的無関心ではなくて、たぶん日常の中にそういうことがあふれてて、どのようにそれを発する場所があるのかが、結構重要なのではないのかなと。そういうふうな、みんなそれぞれの場所で考えてるから、私たちのほうに多様性がたくさんあるんだと思いますので、そういうのが、先ほど SADL の方がおっしゃってた、自分たちひとりひとりが得意なことがあるということかと思えますし、それが結構、強みなのではないかなということも感じます。すいません、ちょっと長くなりました。

岩城 この点について、パネラーの方、もうよろしいですか？ ひととおりご発言をいただきましたか？

坂倉 (POSSE・ブラックバイトユニオン) 問題提起だけして投げっぱなしだったので、ちょっと。僕らとしてはやっぱりその、職場の中で大学生だったりとか高校生とかが、どうやって民主主義を行使できるかっていうのはやっぱり具体的な課題だと思っていて、それがなかなかできないってことなんであれば、これはやっぱり労働運動が全然ダメだってことなのかな、と思って。僕たちとしてはそれをもっと盛り上げていかなきゃいけないということを強く思っています。だからその中で、実際、高校生だったりとか大学生だったりとか、労働組合に入って、団体交渉して、職場を改善するということが続々と起きてる。その中で、それを社会的にどんどん発信して行って、学生とかでも立

ち上がって会社を変えて社会も変えられるんだ、と。さっき塾の話とかもしましたけれども、明光義塾の件なんかに関しては、もうひとつの会社だけじゃなくて、その親会社というか、そのフランチャイズの本部の会社も変えたいし、チェーン全体も変えたいし、全国に2200教室あるんですね。明光義塾ひとつとっても。その全体を変えることができはじめていますし、さらには業界全体に影響を及ぼしてると。さらには、そういった学生が立ち上がって、会社を変えられるっていうモデルを示すことで、そういうことが、むしろ普通にできるんだっていうことを知ってもらいたいし、それは知らせていくっていうことを、どんどん組合がやっていかなきゃいけないと思ってるんですね。

どこまで言っているのかがあるんですけど、関西学生アルバイトユニオンとブラックバイトユニオンで、一緒に、合同で団体交渉をやったっていうコンビニの事件がありまして、ちょっとあまり多くは語れませんが、学生のアルバイトですね、ふたり、それぞれ相談が来たんですけども、どちらも同じコンビニの同じフランチャイズの会社で働いていた人から別々に相談が来て、それが僕らの組合で何か話して、また別々に話したら、あれ、何かそれ同じ会社だね、みたいな話になって、聞いてみると実は同じ会社だった。じゃあ一緒に合同団交やろう、みたいな形で、関ユニさんと一緒に団体交渉して、労働協約まで結んだという事件があります。これはもう来週、記者会見やりませうけれども。これは大阪で労働組合が労働協約を結んで、しかも学生の労働組合が労働協約を結んで解決したっていうケースとしてはたぶん初めてなんじゃないかなというふうに思うんですね。昨日も埼玉サンクスのケースとかもありましたけれども、そうやって全国で、学生が、若者が、そうやって立ち上がって会社にルールを作っていく。法律を全然守らなかったような、本当に学生でも平気で使いつぶすような会社が、むしろ労働組合に、その学生が入って力をつけることによって、もう会社に新しいルールを作ってしまうことができるんだということを、来週発表する予定なんですけれども、そういった事例をどんどん発信して、これは普通なんだというふうに、むしろ職場で民主主義を行使するのが普通なんだと、ぜひ、それを常識にしていきたいなと、僕たちは思っています。

岩城 ありがとうございます。議論をまとめる方向というか、最後の一巡ぐらいになるので、最後に、団体や分野、世代を超えた連帯、今回のテーマなんですけども、そういうものについてどんなお考えをお持ちかということを知りたいと思います。特に、今日は中高年の方も結構来てますので、中高年に対する注文もあれば、してもらったら、と。頑固だとか、自分中心だとか、いろんな意見もあるかもなので、そういう中高年の人に対する注文もしてもらいたい。それと、最後のまとめになりますので、社会を変えることはできるのかということを入れて、ひとりずつ言っていたきたいと思います。最初にお話された順番の逆で、

今度をお願いしたいと思います。AEQUITAS 京都の橋口さんからお願いします。

橋口 (AEQUITAS 京都) 世代間の連帯ですね。それは全然できるし、もう実際にあると思うので、それは可能だと、実際にありますという感じだと思います。自分はちょっと話を小難しくしてしまうかもしれませんが、先ほど出て面白いなと思ったのはデモの文化ですね。デモの中にどうい音楽を使うかっていうところで、でも、そこで断絶なり排除が起こってしまうというのは、日本の、って言ったらあれかもしれない、例えば歌が、歌い継がれている歌があまりない、労働運動の歌が無いということからもあるのかな、というふうに思いました。

あとは、まあ、自分も30代後半で、若者の立場から話せる立場じゃないので、そこは、はい。ただ、そうやって、自分も若者の労働運動ということでやってきた壁を、何とかこう、いわゆる労働者階級ってなかなか簡単にいかないんですけども、そういったところに少しでも広げられたらな、ということでも、最賃の運動をやっているところがあるので、必ず上げますので、上げるようにがんばりますので、今後ともぜひ注目してください。上がったら社会は確実に変わると思ってやっていますので、よろしくお祈りします。

磯田 (ANTS) 連帯については、僕は全然大丈夫やと思います。でもまあ、中で注意したいと思うのは、こうあるべきや、って、僕らもそうやし、若い子らも、歳いった人も、僕らもよう言われてきたんで、「こんなん、こうするべきやで〜」みたいな感じで、押しつけがましいようなことはせんほうがええかなとは思ってます。自分らでやりたいように、だって自分らの友達とか誘ってやるほうが絶対楽しいし、みんなもたぶん、この戦争法とかに関しては、みんな戦争したくないやろう、とかっていうふうに思ってるんで、そういうのは、いろんなやり方、あっていいと思うし、その芯の部分で連帯したら、十分、内容的には一緒につながってるっていう意味になるんちゃうかなと思って、今。

それと、社会を変えられるかということなんですけども、社会はずっと、悪いようにも良いようにも変わってると思います。そやし、僕自体も変わりました。3年前とか4年前いうたら僕ホンマずーっとスケボーやったり、会社終わったら遊びに行く、という感じで、こういう運動に関わるようなこと、無かったです。そやけど、こうやってみんなと関わって、いろんな人と取り組みするっちゃうことで、なんか自分らで作っていけるよな、とか、そういうふうな展望と希望というのを持たしたら、十分こうやって社会変える力になっていくと思いますんで、ぜひ、言うたら、それで、なんかわからんけど、すいません。全国で言うところの、今度、野党が共闘しようっていうふうな形に、声がひろがっていつてると思うんで、僕も変わったけど、僕がもう他の人を変えたいっていう気持ちになってるんで、ぜひ、ね、そういうふうな力っていうの、全然、若い子らに

もあるし、歳いった人らにも、十分あると思いますんで、ぜひ、ね、この力、あれして、やって。はい。おわりで一す。

岩城 次、簡潔に中村さん、お願いします。

中村 (SADL) 僕は社会を変えるということについては、絶対変えれると確信してます。その気持ちだけは誰にも負けるつもりはありません。ただし、僕らもそうですけど、別に年齢とか分野とか団体とか全然関係無く、これまでのやり方で、とか、いつものメンバーで、とか、絶対そういうふうにやってたら、もう絶対変わらないと思います。CHAT4VOTE っていうのを少し言いましたけど、もう日常で、いつも政治の話をしていない人に、ちょっとそういう話をしてみるというだけでも変わってくるんです。ただ、それをずっとしてないとずっと変わらないんです。という、ひとつひとつの、自分たちが日常で何ができるのかっていうのを、絶対、僕も考えていきたいし、皆さんも考えていてほしいと思います。住民投票のときも、脱原発の運動ができたときも、そうやって街の雰囲気は変わっていきまして、皆さんも、ひとりひとりが街の雰囲気を変える行動をしていって下さい。よろしくお願いします。ありがとうございました。

岩城 続いて寺田さん、お願いします。

寺田 (SEALDs 関西) 世代間の連帯に関して、今、私たちがまさに必死にやっているテーマで、この夏は若者が立ち上がったぞー！みたいな感じでメディアにすごく大きく報道されましたけど、でも、あのデモに来てる割合で言ったら、そんなに若者って多いわけではなくって、やっぱり杖をつきながら、戦争を経験されたような世代の方が来られているわけで。その、いろんな世代の人たちが、いったんひとつになって、今回ばかりは野党が協力してくれるなら、何党の候補であろうと推すぞっていうプレッシャーをかけることができたなら、かなり変わってくるなと思ったので、ママの会とか学者の会とか、今までずっとされてきた総がかりの、9条の会、組合、労連みたいな、あんま詳しくないですけど、そういう人たちが全世代で協力して、市民連合を作ろうっていうことで動いて、やっと関西も今月か、市民連合ができたので、そういう動きを全国に加速させていきたいなと思っています。いろんなしがらみを超えて、今、現政権がヤバイ！っていう一点に立って、いろいろできたらいいなと思っていますところですよ。

で、社会は変えられるか。変えれば変わると思います。偉い学者の先生とかが「なぜ SEALDs が社会を変えられないか」みたいなことを、未来を予測してブログに論じておられたりするんですけど、やってみないとわからないし、なぜ変えられないかみたいなことを論じても、ほんとしょうもないので、どうやったら変わるかっていうことをやって、とにかくやってみるっていうことをすれば、少しずつ絶対

変わってくると思います。野党が協力するなんて、私も最初は全然想像してなかったです。でも、やってみればできるっていうことで、変わると思います。

岩城 ありがとうございます。では北出さん、お願いします。

北出 (地域労組おおさか青年部) 世代間の連帯、分野の連帯ということなんですけれども、これは当然、やっていかなければならないことだと思っています。あと、私どもも年配の世代からいろんなことを受け継いだ、勉強させてもらったから活動ができていますし、これはまた下の世代に受け継がせるというのが大切だと思います。あと、どうしても世代間で、要するに、生まれ育った世代や時代が違いますから、どうしても意気投合できない、行き違いが生じることもあるんですけど、それはやっぱり相手のバックボーンを知るとというのが大切ではないかと思えます。こうあるべきだ、というんじゃなくて、相手のバックボーンを知り、そして人間の弱さを受け入れるっていうのが大切ではないかな。そういう意味では、ひとつのカラーに染め上げるというのではなくて、まだら模様でいいから多様性を確保した組織、運動であることが必要ではないかと思えます。

そして最後、社会は変えられるかっていうことなんですけど、今の雇用の劣化であったり、民主主義や立憲主義が危険な状態になっているっていうのも、時代が変わったからではなくて、結局、政策が変わったから、政治が変わったから、人間が変わっていったものですから、これは人間が変えていくことができる、政治を変えれば変わっていくものだと、そういうふうには確信しています。

岩城 関西学生アルバイトユニオンの北村さん、お願いします。

北村 (関西学生アルバイトユニオン) まず世代間、あるいは連帯という話ですけども、これは絶対に必要ですね。なぜなら人口比率がすでに中高年のほうが高いからです。であるならば、どういうふうに対応すべきかということですけど、ひとつ端的に言うならば、失敗談を教えてください。みなさん成功の話はたくさんしていただけてるんですけども、失敗の話はなかなかしていただけない。しかしながら、どういうふうになれば成功するかということは、歴史を振り返る、すなわち失敗した経験からしか学べないのではないかと考えておりますので、とりわけ学生運動世代の皆さんに失敗の歴史を教えてくださいなというふうに思っております。

社会は変えられるかということですけども、先ほども言いましたように、良くも悪くも変わっています。毎日、人は死ぬし、生まれているので、変わるわけなんですけれども、であるならば、どういうふうに、どういう方向で変

えていく必要があるのかということが重要なのではないかと考えております。僕個人の中では、ひとえに言えば、すべての人が安心して働き生活できる社会にすることだと思いますので、そのためにどういふことをするのかは、皆さんでお話していけたらなと思っております。

岩城 ちょっと、SADLの中村さんがひとこと言い忘れたことがあるということなので。

中村 (SADL) 時間押してる中、申し訳ありません。3月21日に、関西市民連合の初めての街頭宣伝をやります。SEALDs 関西の紹介文の下のほうに書いてますけども、3月21日 月曜日の1時スタートで、梅田のヨドバシカメラ前です。みなさん、来週月曜日ですので、ぜひヨドバシカメラ前で会いましょう。よろしくお願いします。

岩城 では最後に POSSE の坂倉さん、お願いします。

坂倉 (POSSE・ブラックバイトユニオン) まず連帯ということなんですけども、実は僕はもともと労働運動という観点から言うと、あまり上の世代を信用していないというのが正直ありまして、というのは、もう本当に、最後なんて言っちゃいますけど、若者は労働運動に対して、ネガティブなイメージがやっぱりあるわけです。今日も労働組合というとか怖い、みたいな話があったかと思えますけども、僕もそう思っていたし、まず労働組合を自分がやることになるとは、とうてい10年前は思っていなかったです。なんですけれども、じゃあ若者でやろうと立ち上がっていくことは重要だと思ってたんですけども、やっぱりそれだけでは無理だというのは、いろんな形でわかるようになってきました。まずひとつは、若者が労働問題に取り組もうと思ったときに、親との関わりとか、上の世代の関わりってすごい重要になってくるんですよ。というのは、たとえばすごくひどいブラック企業で働いている方が、もうこれは裁判やるしかないですっていうふうにならざるを得ないときに、親から止められた。何か、会社にそんな刃向かうなんてよくないよ、というふうに言われてしまったっていうケースがすごくあるんですよ。学生のアルバイトもそうです。ブラックバイトで、もう本当に未払い賃金が40万くらいあって、その人はもう留年するという、本当にかなりひどいケースだったんですね。母子家庭で働いていたんですけど、これは本当にひどいから絶対団体交渉やるべきだと思って、まずはちょっと提案する前にまず1回会わなきゃということで、あまりにもひどすぎるから1回会いましょうというふうにいったところ、当日来なかった。すっぽかしてしまっただ。電話してみたら、お母さんからそういうのをやめてくださいというふうに言われました。そうやって上の世代の方との意識の共通というか、共有というのがかなり重要であるということが経験上もやっぱりあります。ブラック企業問題、ブラックバイト問題に取り

組んでいく中では、やはり最終的に立ち上がるのは若者じゃなければいけないと思うんですけども、やっぱり親世代、上の世代との連携や理解というものがかなり重要になってくると思います。

最後に、社会は変えられるかということなんですけども、私たちはやっぱり労働問題で、徐々に変えられつつあるというふうには思っています。しかも若者たちの意識が変わっているということが結構大きいかないというふうには思っています。結局、ブラックバイトとかブラック企業ということで、本当、高校生とか大学生からもどんどん相談が来る。うちの職場、おかしいから変えたいです、みたいな相談、たくさん多いんですね。それはやっぱり、いろんなデモとか SEALDs とかもあって、ああいうのもあって、やっぱり若者は声を上げられるんだということを、本当にそれを知ったという方なんかすごく多くて、それで自分も職場でまずは声を上げてみたいという方がいらっしやったりするんですね。こういう中で、若者が立ち上がっていく。職場でも街頭でも立ち上がっていくというふうな意識が今、広がってつある。これがやっぱり大きな希望なのかなというふうには思っています。

岩城 はい、ありがとうございました。それでは皆さん、7団体の皆さんにお礼の拍手をよろしくお願いします。ありがとうございました。

清水 それでは最後に、「つどい宣言」というのを行いたいと思います。では、NPO 法人働き方 ASU-NET の定永より、つどい宣言を行います。

定永 読ませていただきます。一部省略させていただきます。

「本日、私たちは、若者のおかれた現状を変革したいという、わき上がる熱い思いをお聞きしました。『自分たちの未来は自分たちで決める』という若者の強い声と、柔軟でいて地に足を付けた取り組みには目をみはるものがあります。海の向こうからも政治と雇用に異議を申し立てる若者たちの声が聞こえてきています。平和と民主主義と暮らしが危機にさらされるとき、長い苦悩と道のりを切り開いてきた、壮年、熟年世代の底力も捨てたものではありません。若者たちの、素直に思いを伝え合い、柔軟で壁を作らない運動の新しい流れに学びながら、すべての世代の人々が語り合い、つながりあって、政治を変え、働き方を変えて、この国の未来を切り開くために、ともに前に進みましょう。ここに本つどいの名において宣言します。2016年3月16日 NPO 法人働き方 ASU-NET 第24回つどい」

清水 ありがとうございます。本日は145名の方に参加いただきました。誠にありがとうございました。また、カンパとして合計52,919円いただきました。ご支援ありがとうございました。以上をもちまして、本日のつどいを

終了させていただきます。お気をつけてお帰りください。
誠にありがとうございました。資料の中に参加者アンケートという用紙が入っておりますので、ぜひご記入いただきまして、後方にご提出ください。